東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

3歳児健診における特別なニーズと子育て支援ニーズについて：茨城県A町の健診結果からの検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 麻里子, 橋本, 創一, 菅野, 敦, 山田, 博子, 村田, 啓子, 秋山, 幸子, 磯崎, 広美, 山崎, 恵美, 布袋, 由美子, 藤田, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/1464

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　**57**　pp. 447～454，2006

3歳児健診における特別なニーズと子育て支援ニーズについて

―― 茨城県A町の健診結果からの検討 ――

田村麻里子*・橋本創一**・菅野敦**・山田博子***・村田啓子***
秋山幸子***・磯崎広美***・山崎恵美***・布袋由美子***・藤田道子****

教育実践研究支援センター**

（2005年9月30日受理）

キーワード：3歳児検診，特別なニーズ，気になる行動・習癖

1．はじめに

近年の虐待や育児不安の増加から，厚生労働省は施策として「健やか親子21」で“子どものこころ安らかな発達の促進と育児不安の軽減”を課題のひとつとしている。その具体的な取り組みとして，育児支援の観点から乳幼児健診等地域保健における早期発見・早期療育，保健指導の見直しの必要性をあげている。しかし，乳幼児健康診査の実施主体は市町村のため，その取り組みは様々である。また，乳幼児健康診査における先行研究には，障害の検出率や障害種別の項目通過率，健診・フォローシステムの研究が多く，健診結果からの詳しい特徴を検証したものは少ない。

今回，研究対象とした茨城県A町は，フォロー率が著しく高い自治体である。先行研究において，全国の健診後の平均フォロー率は13.5％とされており（近藤，2001），本研究で対象としたA町のある茨城県のフォロー率平均は7.0％である（茨城県衛生部，2002）。A町のフォロー判定は，医師による身体疾患，精神・神経疾患の有無などの診察結果，保健師や心理職などによる問診，面接，親の主訴，親の養育態度，子の様子（発達上の行動など），養育環境，さらに子育て上の親の悩みや子の心配な行動などから，疾患・障害の発見，リスク要因の有無にとどまらず，広く子育て上のニーズも総合的に把握した上で行っている。こうしたA町の3歳児健康診査項目の中から「子どもの発達に関する実態（直接観察・聴取）」「子どもの発達に関する親の心配・悩みに関するもの」「発達以外の心配・悩みに関するもの」をもとに，受診児の発達特徴を検討し，

1）発達の遅れなどの障害児の早期発見のために重要な項目
2）非障害児ではあるが育児支援が必要と考える児の発見や支援を検討するべき項目

を選定・明らかにすることを本研究の目的とした。本研究では問診と面接検査のみの調査で行った健診項目にもとづいて討論することとした。

2．対象と方法

2．1．対象

茨城県A町のH1年度生まれからH12年度生まれの1歳6ヵ月児健康診査（以下，1・6健）を受けた1,086人と3歳児健康診査（以下，3健）を受けた1,171人。1・6健から3健診までを追跡調査し，健診結果から以下のように群分けを行った。①1・6健も3健も異常なしだった児を「ノーマル群」，②1・6健で要フォローだったが，3健で異常なしだった児を「キャッチアップ群」，③1・6健で異常なしだったが3健で要フォローだった児を「要フォロー群」，④1・6健，3健両方で要フォローだった児を「ハイリスク群」，⑤1・6

＊　茨城県立医療大学保健医療学部看護学科
＊＊　東京学芸大学教育実践研究支援センター（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊＊＊　茨城県利根町保健師
＊＊＊＊　茨城県利根町看護師

健，3 健どちらかで要フォローだったが転出または未受診で追跡できなかったものを「未追跡群」とした。また，転出入や未受診で 1・6 健または 3 健どちらかしか受けてないが異常なしだった児は異常なし群とした。また，ノーマル群とフォローされた群での項目の比較検討を行うため，「キャッチアップ群」，「要フォロー群」，「ハイリスク群」をまとめて「フォロー群」とした。

ノーマル群は受診した935人79.8％，フォロー群は219人18.7％，キャッチアップ群79名6.7％，要フォロー群26名2.2％，ハイリスク群79名6.7％，未追跡群17名1.5％であった。男女比は，ノーマル群は男50.6％：，女49.4％，フォロー群男70.8％：女29.2％，キャッチアップ群男66.7％：女33.3％，要フォロー群男65.4％：女34.6％，ハイリスク群男78.5％：女21.5％，未追跡群男47.1％，女52.9％であった。

2．2．方法

1）本研究では，3 健問診，会場での検査の通過率・不通過率を判定基準から①から⑤のグループ化したものをもとに率を調査した。

2）3 健で問診項目，会場での検査で共通の項目を①運動面，②コミュニケーション面，③生活面，④習癖・気になる行動面の 4 つのカテゴリーにし，判定別に不通過率の集計を行った。

なお性差による検証は行わないこととした。

3．分析視点

1）判定別群間比較：判定別群間比較は，項目を運動面，コミュニケーション面，生活面，習癖・気になる行動面の 4 つのカテゴリー別にし，カテゴリー別に①各群不通過率平均，②各群不通過率の高率な項目順位，③不通過率群間差，カテゴリー別ではなくすべての項目での④項目別比較で分析を行った。但し，群間比較は，要フォロー群の該当人数が少ないため単独での群間比較は行わないこととした。

③の不通過率群間差の検討は，項目のノーマル群対ハイリスク群比較におけるカイ二乗検定で分析を行った。

2）習癖・気になる行動のあり群なし群からみた比較：1）同様のカテゴリーで①カテゴリー別群間比較，②項目別群間比較を人数比から行った。

＊項目において「検査大小比較」，「検査積木トラック模倣」は，会場での検査であり，それ以外は問診項目である。

4．結果・考察

4．1．判定別比較

1）運動面

①群別不通過率平均

ノーマル群で不通過率の平均は1.0％，キャッチアップ群1.8％，ハイリスク群7.6％であった。筆者が同様の対象で調査した1.6健では（田村他，2005），ノーマル群で不通過率の平均は1.0％，フォロー群では6.4％，キャッチアップ群では，10.9％。ハイリスク群は11.4％であったことから，運動面の平均は，3 健において低率になっていた。

②群別項目順位

ノーマル群の不通過率の高かった順位は，「歩き方の心配」，「丸をかける」，「ジャンプ」であった。キャッチアップ群は，「歩き方の心配」，「丸をかける」が同率で一位であり，「ジャンプ」，「積み木」は 0 ％であった。ハイリスク群は，「丸をかける」，「ジャンプ」の順位で高く，次に「歩き方の心配」，「積木」

表 1　判定別各群人数、男女別人数

判定	ノーマル群	キャッチアップ群	要フォロー群	ハイリスク群	未追跡群
男	473(50.6%)	76(66.7%)	17(65.4%)	62(78.5%)	8(47.1%)
女	462(49.4%)	38(33.3%)	9(34.6%)	17(21.5%)	9(52.9%)
合計数	935(79.8%)	114(9.7%)	26(2.2%)	79(6.7%)	17(1.5%)

表 2　運動面不通過率群別比較

	ノーマル群	フォロー群	キャッチアップ群	ハイリスク群	
歩行の心配	3.1%	3.2%	3.5%	3.8%	
ジャンプ	0.1%	2.7%	0.0%	7.6%	***
積み木	0.0%	1.4%	0.0%	3.8%	***
○をかける	1.0%	8.2%	3.5%	15.2%	***
平均	1.0%	3.9%	1.8%	7.6%	

*はp＜0.01、**はp＜0.005、***はp＜0.001である

が同率であった。

③不通過率群間差

運動面の中で，フォロー群とノーマル群で差が大きかったのは，「丸が書ける」+14.2%「ジャンプ」+7.1%，「積み木」+3.8%，「歩き方の心配」+0.7%フォロー群が高かった。ノーマル群とキャッチアップ群での比較では，「丸が書ける」+2.5%，「歩き方の心配」+0.4%キャッチアップ群が高かった。キャッチアップ群とハイリスク群では，「丸が書ける」+11.7%「ジャンプ」7.6%，「積み木」+3.8%，「歩き方の心配」+0.3%フォロー群が高かった。有意差があったものも，「丸が書ける」，「ジャンプ」，「積み木」であった。

しかし，「積み木」は，問診表では積み木を数個積めることができますか，という問診で不通過総数は4名，「ジャンプ」は，ジャンプができますか，という問診で不通過総数は9名であった。「積み木が数個積める」，は16～22ヶ月レベル，「ジャンプ」は22～25ヶ月レベルの課題であり，3健問診項目としての妥当であるか検討することが必要であると考えられた。

これらのことから，運動面においては「丸が書ける」は，発達障害の発見において重要項目であると考えられる。

2）コミュニケーション面

①群別不通過率平均

ノーマル群で不通過率の平均は6.5％，フォロー群では16.1％，キャッチアップ群9.7％，ハイリスク群24.2％であった。1.6健ではノーマル群で不通過率の平均は5.0％，フォロー群では14.9％，キャッチアップ群は16.8％，ハイリスク群では26.1％であり，大きな変動は見られなかった。

②項目順位

ノーマル群で不通過率が高かった順位は，「極端に言うことをきかない」，「大人に頼る」，「友達と遊べる」であった。フォロー群は，「大人に頼る」，「３語文以上話せる」「極端に言うことをきかない」，「検査大小比較」であった。キャッチアップ群は，「極端に言うことをきかない」，「大人に頼る」，「不安が強い」，「友達と遊べる」であり，ハイリスク群は「３語文」，「検査大小比較」，「大人に頼る」，「検査積木トラック模倣」であった。順位はノーマル群とフォロー群では全く違っていた。

③項目差

ノーマル群とフォロー群で差が大きかったのは，「３語文」+24.0%，「検査大小比較」+18.3%，「検査トラック模倣」+12.9%フォロー群が高かった。ノーマル群とハイリスク群で差では，「３語文」+47.5%，「検査大小比較」+36.2%，「検査トラック模倣」+25.6%，「言語だけでの理解困難」+13.6%ハイリスク群が高く，キャッチアップ群とハイリスク群ではフォロー群が「３語文」+43.7%，「検査大小比較」+35.4%，「検査トラック模倣」+26.5%，「言語の心配」+20.1%，ハイリスク群が「極端に言うことをきかない」+5.1%「不安が強い」+3.9%はであった。

これらのことから，コミュニケーション面では「３語文」，「検査大小比較」，「検査トラック模倣」，「言語だけでの理解困難」は，発達面の問題を発見する上で重要項目であると考えられた。

3）生活面

①群別不通過率平均

ノーマル群で不通過率の平均は11.7％，フォロー群では17.8％，キャッチアップ群は15.4％

ハイリスク群19.6％と，判定別ごとに高率になった。

②項目順位

ノーマル群で不通過率の高かった順位は「排泄面」，

表３　コミュニケーション面不通過率群別比較

	ノーマル群	フォロー群	キャッチアップ群	ハイリスク群	
3語文	0.6%	24.7%	4.4%	48.1%	***
発音	5.5%	8.2%	6.1%	13.9%	*
極端に言うこと聞かない	18.4%	24.7%	25.4%	20.3%	
不安が強い	7.5%	11.4%	14.0%	10.1%	
自分でやりたがる	3.6%	8.7%	7.0%	11.4%	**
大人に頼る	15.7%	26.5%	23.7%	31.6%	***
友達と遊べる	9.2%	14.6%	10.5%	21.5%	**
言語だけの理解困難	1.6%	7.8%	4.4%	15.2%	***
言葉の心配	3.5%	13.7%	6.1%	26.6%	***
検査積み木トラック模倣	3.5%	16.4%	2.6%	29.1%	***
検査大小比較	1.8%	20.1%	2.6%	38.0%	***
平均	6.5%	16.1%	9.7%	24.2%	

「睡眠面」であった。フォロー群，キャッチアップ群，ハイリスク群でも同じであった。

③項目差

ノーマル群とフォロー群の不通過率の差は，「排泄面」10.2％，「睡眠面」2.0％であった。ノーマル群とハイリスク群での比較では，ハイリスク群が「排泄面」+15.3%，「睡眠面」+0.4%，キャッチアップ群とハイリスク群比較では，ハイリスク群が「排泄面」+9.7%，キャッチアップ群が「睡眠面」-1.2%であった。

4）習癖・気になる行動

①群別出現率平均

ノーマル群で何かしらの習癖・気になる行動があった割合は49.6％，フォロー群53.9％，キャッチアップ群54.4％，ハイリスク群53.2％であり，群間差はあまりみられなかった。

②項目順位

ノーマル群で割合が高かったものは，「偏食」，「小食」，「指しゃぶり」であった。フォロー群では，「小食」，「偏食」，「指しゃぶり」であり，キャッチアップ群，ハイリスク群も同様であった。各群において順位は違っても，項目は同じであった。

③項目差

「小食」は9.9％フォロー群が多い他はすべて３％未満であり，ほとんど差はみられなかった。

カテゴリー別では，コミュニケーション面において大きな差がみられ，習癖・気になる行動面ではほとんど差がみられないという結果であった。

４．２．項目別比較

運動面，コミュニケーション面，生活面における項目でみていくと，ノーマル群の不通過率が10％を超えた項目は，「極端に言うことをきかない」18.4％，「排泄面で困っていることがある」16.3％，「大人に頼る」15.7％であった。ハイリスク群では20％を超えた項目は，「大人に頼る」「排泄面で困っていることがある」26.5％，「３語文以上」「極端に言うことをきかない」24.7％，検査大小比較20.1％であり，ノーマル群と順位は違っていた。ノーマル群，キャッチアップ群では高率項目は同じであったが，不通過率はすべてキャッチアップ群が高かった

さらに，ノーマル群，キャッチアップ群で高率だった項目について，ハイリスク群との比較を行った。5項目を各群で比較して見ると，「大人に頼る」，「友達と遊べる」，「排泄面」はノーマル群，キャッチアップ群，ハイリスク群の順に不通過率が高率になっている。しかし，「極端に言うことをきかない」，「不安が強い」はハ

表４　生活面不通過率群別比較

	ノーマル群	フォロー群	キャッチアップ群	ハイリスク群	
排泄面	16.3%	26.5%	21.9%	31.6%	***
睡眠面	7.2%	9.1%	8.8%	7.6%	
平均	11.7%	17.8%	15.4%	19.6%	

表５　習癖・気になる行動面出現率群別比較

	ノーマル群	フォロー群	キャッチアップ群	ハイリスク群	
問題行動あり	49.6%	53.9%	54.4%	53.2%	
指しゃぶり	13.3%	12.8%	11.4%	12.7%	
爪かみ	4.1%	2.7%	2.6%	3.8%	
睡眠面	2.0%	1.8%	3.5%	0.0%	+
性器いじり	2.1%	3.2%	2.6%	5.1%	
人への関心	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	
チック	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	
乱暴	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%	
常に物をもつ	1.7%	3.2%	1.8%	3.8%	*
その他	6.2%	5.0%	6.1%	5.1%	
偏食	17.7%	17.4%	16.7%	16.5%	
むら食い	3.7%	4.1%	4.4%	3.8%	
小食	14.3%	24.2%	24.6%	24.1%	*

表６　各群不通過高率順位項目比較１

ノーマル群		キャッチアップ群		ハイリスク群	
1 極端に言うこと聞かない	18.4%	極端に言うこと聞かない	25.4%	3語文	48.1%
2 排泄面	16.3%	大人に頼る	23.7%	検査大小比較	38.0%
3 大人に頼る	15.7%	排泄面	21.9%	排泄面	31.6%
4 友達と遊べる	9.2%	不安が強い	14.0%	大人に頼る	31.6%
5 不安が強い	7.5%	友達と遊べる	10.5%	検査積木トラック模	29.1%

イリスク群よりキャッチアップ群の方が高率であった。

４．３．習癖・気になる行動の有無による検討

１）なし群，あり群人数，判定別にみた割合

受診者中，習癖・気になる行動のなし群は，591名50.5％，あり群は579名49.5％であり，なし群が1.0％多かった。各群内の男女比は，なし群は男56.1%，女45.9%，あり群は男52.1%，女47.8%であり，大きな差は見られなかった。

各群の判定群別内訳は，なし群では，ノーマル群50.7%，キャッチアップ群45.6%，ハイリスク群46.8%であった。あり群ではノーマル群49.3%，キャッチアップ群54.4%，ハイリスク群53.2%であった。判定群別に比較すると，あり群がノーマル群では-1.4%，キャッチアップ群+8.8%，ハイリスク群+4.6%であり，なし群・あり群に大きな差は見られなかった。

２）カテゴリー別比較

各項目の不通過人数をなし群，あり群の割合を比較する。

⑴　運動面

①群別平均・項目順位

運動面においてなし群の平均は50.8%，あり群では49.2%であり，ほぼ同率であった。　高率項目順位はなし群では「積み木」，「ジャンプ」，「歩き方の心配」，「丸をかける」であった。あり群では，「丸をかける」，「歩き方の心配」，「ジャンプ」，「積み木」の順であった。

②群間差

あり群が「丸をかける」が+35.7%，「歩き方の心配」+18.9%であった。

⑵　コミュニケーション面

①群別平均・項目順位

表７　各群不通過高率順位項目比較２

	ノーマル群	キャッチアップ群	ハイリスク群
極端に言うこと聞かない	18.4%	25.4%	20.3%
不安が強い	7.5%	14.0%	10.1%
大人に頼る	15.7%	23.7%	31.6%
友達と遊べる	9.2%	10.5%	21.5%
排泄面	16.3%	21.9%	31.6%

表８　習癖・気になる行動各群人数・男女別人数比較

		なし群		あり群	
男	女	333	258	302	277
総数		591		579	
男女比		56.1%	45.9%	52.1%	47.8%
人数比		50.5%		49.5%	

表９　習癖・気になる行動判定別人数

	なし群	あり群
ノーマル群	475 50.7%	462 49.3%
キャッチアップ群	52 45.6%	62 54.4%
要フォロー群	12 46.2%	14 53.8%
ハイリスク群	37 46.8%	42 53.2%
その他	14 82.4%	3 17.6%

表10　運動面不通過人数比

	なし	あり	差
歩行	40.5%	59.5%	18.9%
ジャンプ	55.6%	44.4%	−11.1%
積み木	75.0%	25.0%	−50.0%
○をかける	32.1%	67.9%	35.7%
平均	50.8%	49.2%	−1.6%

コミュニケーション面不通過率の人数比平均は，なし群43.3%，あり群56.7%で，あり群が13.5%多かった。なし群で総人数比（50.5%）より多かったものは，「検査大小比較」，「３語文」，「トラック模倣」であった。あり群では総人数比（49.5%）より多かった項目は，「不安が強い」，「発音の心配」，「友達と遊べる」，「極端に言うことを聞かない」，「言語だけの理解困難」，「自分でやりたがる」，「大人に頼る」，「言葉の心配」であった。

②群間差

なし群とあり群を比較すると「不安が強い」+47.4%，「発音の心配」+29.6%，「友達と遊べる」+26.2%，「極端に言うことを聞かない」+26.0%，「言語だけの理解困難」+21.4%，「自分でやりたがる」+20.8%，「大人に頼る」+17.5%の順であり群が多かった。

⑶　生活面

①群別平均，項目順位

なし群の平均は，18.6%，あり群81.4%であった。不通過率の高率だった順位は，なし群では，「排泄面での心配」，「睡眠面面での心配」であり，あり群では「睡眠面」，「排泄面」であった。

②群間差

項目の群間差は，あり群が「睡眠面」+92.8%，「排泄面」+32.9%であった。「睡眠面」はほとんどがあり群であった。

⑷　群間差高率項目順位

あり群がなし群より不通過率の差が高かった項目の順位を調査した。

習癖・気になる行動のあり群の不通過の多かった項目は，「睡眠面」，「不安が強い」，「丸をかける」，「排泄面」，「発音」，「友達と遊べる」，「極端に言うこと聞かない」，「言語だけの理解困難」，「自分でやりたがる」の順であった。

一番多かった「睡眠面面」の具体的な内容としては，夜泣き，寝つきが悪いなどであり，睡眠面リズムの確立のしにくさが考えられる。「不安の強さ」の内容としては，場・人への慣れにくさ，特定の音や物への恐れであった。「排泄面」の内容は，おむつが取れない，ウンチだけはおむつにする，などであった。以下，「極端に言うことを聞かない」，「丸をかける」，「発音の心配」，「言語だけの理解困難」，「自分

表11　コミュニケーション面不通過率人数比

	なし群	あり群	差
3語文	57.5%	42.5%	−15.1%
発音	35.2%	64.8%	29.6%
極端に言うこと聞かない	37.0%	63.0%	26.0%
不安が強い	26.3%	73.7%	47.4%
自分でやりたがる	39.6%	60.4%	20.8%
大人に頼る	41.3%	58.7%	17.5%
友達と遊べる	36.9%	63.1%	26.2%
言葉の心配	50.0%	50.0%	0.0%
言語だけの理解困難	39.3%	60.7%	21.4%
検査トラック模倣	54.3%	45.7%	−8.7%
検査大小比較	58.5%	41.5%	−17.1%
平均	43.3%	56.7%	13.5%

表12　生活面不通過人数比

	なし群	あり群	差
排泄面	33.6%	66.4%	32.9%
睡眠面	3.6%	96.4%	92.8%
平均	18.6%	81.4%	62.8%

表13　群間差高率順位

1	睡眠
2	不安が強い
3	丸を書ける
4	排泄面
5	発音
6	友達と遊べる
7	極端にいうことをきかない
8	言語だけの理解困難
9	自分でやりたがる

でやりたがる」，これらどの項目も，気質的な要因も考えられるが，広汎性発達障害などの軽度発達障害児の養育者からの訴えのあった幼児期に見られる行動特徴と類似している。（石川，1999；小枝ほか，2002；根来ほか，2004）今回の研究において，受診児の追跡調査をすることはできないが，追跡調査していくと軽度発達障害を診断される児がいることが予測されるが，現在の幼児健診では，軽度発達障害は両親側が問題に気づいていながら見逃されやすいと言われている（杉山，1999；小枝，2002）ように，軽度発達障害の早期発見が難しい状況にある。しかし，これらの問題を抱えた子どもの養育者は，育児に不安や困難感を抱えることが予測される。子ども側の障害を早期に発見するだけでなく，養育者の不安や困難感を十分に把握し，子どもへのかかわり方など具体的な育児支援が早期に，そして継続的に行われることが必要であると考える。

今回，習癖・気になる行動がある場合，発達面に問題がなくても①睡眠リズムの確立のしにくい傾向，②言語だけでの指示理解が困難な傾向，③微細な運動が不器用な傾向，があることがわかった。今後，障害のありなしに関わらず，親の育児困難感などを聞き取ることのできるような問診・健診内容の検討を行い，必要としている支援を明らかにしていくことが今後の課題である。

文献

1）全障研障害乳幼児施策全国実態調査委員会：京都府・京都市の早期発見・対応の現状と課題，障害者問題研究，29(2)，156-164，2001.

2）小泉毅，薄田祥子，田先由紀子，青山雅子，今成京子，遠山和美，高波厚子：言語遅滞児の1歳6ヵ月児健康診査における早期発見・早期ケアの試み－1歳半健診から3歳健診までの3年間の疫学的追跡研究－，小児の精神と神経，27(3)，103-117，1987.

3）田先由紀子，小泉毅，薄田祥子，青山雅子，今成京子，遠山和美，高波厚子：言語遅滞児の1歳6ヵ月児健康診査における早期発見1歳半健診から3歳健診までの3年間の疫学的追跡研究－1歳6ヵ月児健診の13項目のチェックリストと3歳児健診時の発達障害との関係－，新潟大学教育学部紀要，30(2)，255-262，1989.

4）近藤直子，白石恵理子，張貞京，藤野友紀，松原巨子：自治体における障害乳幼児施策の実態，障害者問題研究，29(②)，96-123，2001.

5）伊藤英夫，松田景子，近藤清美：1歳6ヵ月児健康診査における発達障害児のスクリーニングシステムとそのフォロー体制に関する全国実態調査，34(3)，1994.

6）長野県精神福祉センター：乳幼児精神発達健診システムに関する報告書，1996.

7）茨城県保健衛生部：茨城県母子保健統計．2002

8）腰川一恵：地域支援システムにおける乳幼児健診とフォローアップ体制，発達障害支援システム学研究，3(1)，39-44，2003.

9）田村麻里子，橋本創一，菅野敦，山田博子，村田啓子，秋山幸子，磯崎広美，山崎恵美，布袋由美子，藤田道子：1歳6ヶ月児健康診査による特別ニーズと子育て支援ニーズについて－茨城県A町の健診結果による検討－，東京学芸大学教育実践研究センター紀要(1)，13-20，2005.

10）杉山登志郎，辻井正次：高機能広汎性発達障害－アスペルガー症候群と高機能自閉症－，ブレーン社，1999.

11）小枝達也：ADHD，LD，HFPDD，軽度MR児　保健指導マニュアル，診断と治療社，2002.

12）根来あゆみ，山下光，竹田契一：軽度発達障害児の主観的育てにくさ感，発達，97(25)，13-18，ミネルヴァ書房，2004.

13）宮本広善：子育てを支える療育〈医療モデル〉から〈生活モデル〉への転換を，ぶどう社，2001.

14）和田紀子：三歳児健診を受診した児に見られる問題と家族機能の評価，小児保健研究，59(1)，25-34，2000.

15）川崎千里：【発達障害児とその家族への支援】　高機能広汎性発達障害，小児の精神と神経，41(2･3)，139-141，2001

Special needs and childcare support needs at health checkups for 3 years of age

Mariko TAMURA*, Soichi HASHIMOTO**, Atsushi KANNO**, Hiroko YAMADA***,
Keiko MURATA***, Sachiko AKIYAMA***, Hiromi ISOZAKI***,
Megumi YAMAZAKI***, Yumiko HOUTAI***, Michiko FUJITA****

Center for the Research and Support of Educational Practice **

Key words : health check-ups for 3 year of age, Special needs ,signs of behavioral issues

The subjects were 1,086 children who had undertaken health checkups at 1 year 6 months of age and 1,171 children who had undertaken health checkups at 3 years of age in a town. They were divided into 5 groups: main groups ① normal group (passed health checkups at both ages), ② catch-up group (found to be at risk at 1;6, but passed at age 3), ③ high-risk group (found to be at risk at both 1;6 and 3;0). The normal group consisted of 79.8% of the children, the catch-up group, 6.7%, and the high-risk group, 6.7%.Results suggested that check-up items important for early detection of disabled children at 3 years of age were 'draw a circle', 'imitative truck of blocks at task', 'choice of big or small at task', and 'verbal understanding without gestures'. Children with signs of behavioral issues exhibited the following characteristics: ① difficulties with sleep, ② difficulty with basic verbal understanding and verbal expression, ③ clumsiness of coordination in fine movements. It is speculated that these characteristics cause parents to feel apprehensive and a sense of burden in childcare. Further research is needed to develop checkup contents to obtain information concerning parental feelings towards childcare, and to find ways to use the information for parental support.

* Ibaraki prefectural university of health science
** Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)
*** Public health nurse, Tone Town, Ibaraki Prefecture
**** Nurse, Tone Town, Ibaraki Prefecture